

2018.4.19

今回お伺いしたのは、須野原豊さん(1975年(昭和50年)卒業)。須野原さんは旧運輸省・現国土交通省港湾局にて長年お勤めされ、現在は日本港湾協会の理事長として、港湾に携わるお仕事を長らくされています。

今回は赤坂見附にある日本港湾協会とその近くのレストランにて、これまで携わったお仕事や働き方についてお話を伺いました。

## 港湾に携わる

### 港湾局ではやりたいことをやらせてもらえた。

国土交通省の大きな仕事の1つは社会資本整備です。なかでも港湾局が責任を負う港は民間の様々な立場の方が経済活動を行う場なので、付き合う人達のバラエティが富んでいて、自由闊達に議論できる面白さがあります。お互いの話を聴かないと仕事が始まりませんから。



中央が須野原豊さん、左端は内藤さん(国交省港湾局) 日本港湾協会理事長室にて。

そういう自由な雰囲気の中で自分で考えたことを政策として提言できる、もし有効であればすぐに取り入れて貰える、それが港湾局の一番の魅力です。政策提言とは、常に価値観と問題意識を持って、課題を発見して、現状を変えていくことです。私の例を引くと、大は空港の液状化対策から小は独身寮の建物設備の向上まで、様々なスケールの仕事に取組みました。私でなくてもいずれは誰かがやったのでしょしょうが、誰かが言い始めないと政策は作られませんし動きもしません。昔から部下には「前例主義でやるなら、お前はいらぬよ」と伝えていますが、ただ同じことを繰り返すなら、人間よりもコンピューターの方が得意なわけですから、「何かおかしい」と考えて政策を提言するのが人間の仕事であり、それを真っ先にやれるのが役所だと考えています。こう言うと学生さんには驚かれるかもしれませんが、上から言われたことをこなすのは入省してすぐの時だけです、自分で政策を考えられるのは楽しいものなので、省庁の仕事をステレオタイプに捉えることなく、何をやっているかの全体像を是非知って欲しいと思います。

### 海外に5回以上、地方に7回、色んな場所に行かせてもらえた。

仕事を通じて各地に行けるのも国交省の魅力だと思います。私は留学でメキシコとスペイン、ODA案件でタイ、ラオス、サモア等に行き、日本国内では新潟、横浜、名古屋、大阪、神戸、広島、北九州に転勤しました。国内各地で、その地域の色んな人達とお付き合いできたのは楽しかったです。その土地でしか解らないことがたくさんありました。

海外の仕事で特に面白かったのはラオスでの河川港湾工事です。現地調査から施設のレイアウト設計、契約のサインまでを約4週間でこなすために毎日3時間くらいの睡眠時間で働いていました。30年以上前の若い時期だったから出来た仕事ですが、自分で設計したものが描いた通りに最終的に出来上がり、今でもGoogle Earthを使えば確認できるのは嬉しいものです。

## コラム 港湾の視点から国のインフラ戦略を考える

昨年、一昨年と、デンマークに行って当地の交通体系に驚きました。ヨーロッパの交差点の多くがラウンドアバウトなのはご存知だと思いますが、長尺物を通す時などには平常時は閉鎖している中央島の部分を活用することは私も知りませんでした。主要な幹線道路に関する計画において、60~70mの長尺物を通せるようにそのような基準が決まっているそうです。当地では長らく再生可能エネルギーの利用に取り組んでおり、洋上風力用の巨大風車の羽や支柱部分を運ぶ時に港湾だけでなく陸上の道路も通行する必要があることを踏まえて、このような交通体系を20年以上の時間スケールで構想しているようです。

港湾局に勤めていた時、歩道橋が世界基準と比較して低く物流のネックになるので道路局に相談に行きました。港湾や空港の制度はグローバルスタンダードに従わなければいけない一方で、道路などの制度は国内でクローズされるという性質の違いがあるので、結果として不都合が発生することはあります。しかし、デンマークの交通体系を見て、「国全体でどういう産業政策を行い、そのためにハードとソフトのインフラをどう整備していくか」という国の戦略には見習うところがあると思いました。日本でも道路局や港湾局単独で仕組みを考えるのではなく、国全体のインフラ戦略を先に話し合い、異なりがちな制度を一体化する方法を今まで以上に考えていければ良いと思います。

2018.4.19

## 出会ってきた人々

仕事を通じて偶然知り合う、そういった繋がりを大切にしてきた。

### ホストファミリーとの親交は30年になる。

若い頃に交換留学制度を利用してメキシコに行き、グアナファトという世界遺産の街の大学で現地の歴史や文化を学ばせて貰いました。現地で留学生は1人1人別々の家にホームステイしていたのですが、当時のホストファミリーとは今でもお付き合いを続けています。家内も長らく知っていますし、息子も遊びに行かせて頂いたことがあります。

### ホスト側として迎えることもある。

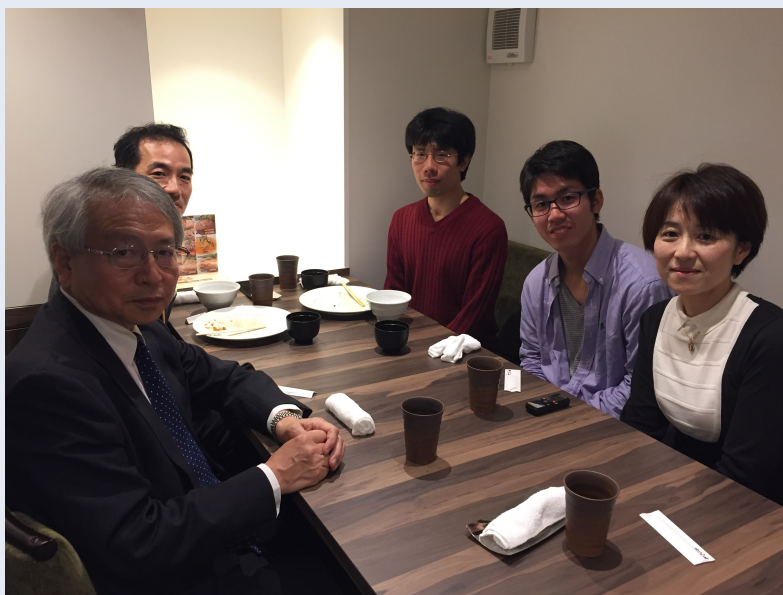
去年、オーストラリアで会議があって、アメリカのコミッショナーの方と知り合いになりました。お嬢さんが日本で英語を教えているそうで、帰国したら当のお嬢さんからメールがありました。「パートナーと一緒に遊びに行っているいいですか」と尋ねられたので「いいよ」と返事すると、彼氏と一緒に家に遊びに来ました。それからアットホームな付き合いを続けています。

### 地方への転勤は沢山の方々と出会える機会。

国交省では本省と地方を2:1くらいの比率で転勤していましたが、地方への赴任は沢山の方々と付き合える機会だと思っています。仕事上で偶然知り合うことが多かったですが、各地の人達とは未だに交遊が続いています。この前には、出向していた広島でとても御世話になった方がお亡くなりになったのでお線香をあげに行かせて頂きました。

### 家族ぐるみの付き合いも多い。

実は「私の知り合いは家内も知っている」という関係がほとんどです。ベルギーの事務所の方とメールでやり取りしたり、新潟の製菓学校の学園長さんにお菓子を評価して貰ったり、家内の方が地元の人達と付き合い合っているかもしれません。加えて、息子も人と付き合い合うのが好きなので、息子があちこちに遊びに行かせて頂いたり、逆にうちで人を歓迎したりしてきました。



ランチのハンバーグを食べながらのインタビュー  
(写真は食後の様子です)

### 「長く付き合う」ということ。

とはいえ、学生時代から「人との繋がりを大事にしよう」と意識して考えていたわけではありません。仕事を経るうちに、段々とそういう風に考えるようになりました。地方転勤が多い仕事でしたが、例えば休日に家に呼んで頂いたり、筍掘りに連れて行って頂いたりして、その土地、その土地で出会う人達に本当によくして頂いたので、なおさらそのように考えるようになったのだと思います。

一度会った人と長く付き合うには、特別なことが必要なわけではなくて、例えば多少こまめに連絡を取り合ったりするなど、少しの気遣いが大事なのだと思います。仕事上の関係の人とは黙ってても仕事で付き合うので、それが当たり前だと思ってしまいがちですが、仕事での関係が終わった後にも良い関係を続けられるかは、その人次第だと私は思います。

## コラム 内藤さんからみた国交省港湾局の仕事

『港湾』は公物ではありますが、民間の方々の経済活動や産業の場でもあるので、「その方達がどういうものを求めているか」「どういう風に使えば勝手良くすべきか」について一緒に考えていく必要があります。たとえばこの前、長崎に出向して働いていたのですが、そこでの仕事も面白かったですね。現地に行って初めて「長崎には離島が多い」ということを強く意識しました。離島生活を支えるのは『港』です。港から色んな物資を運びこみ、港を經由して人が移動します。規模は小さいかもしれませんが、地元の人達や事業者の方々と一緒に話して、色んな課題を抱えつつ夢を語っていたのが楽しかったです。

(文責：修士1年 荒木雅弘)